

降誕日（クリスマス） 説教 「生涯の土台」要旨
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年12月25日

フィリピの信徒への手紙2：1-11

クリスマスおめでとうございます。この日の訪れを心待ちにしてきたのがこの場にいる私たちであります。ただ、私たちがこの日を待ち望んできたのは、クリスマスが大人も子どもも喜べる、そういう嬉しい年中行事の一つだからではありません。もちろん、そういう意味合いもあります。そして、そう思うことは、私たちの信仰においても間違ったことではありません。私たちの喜びは神様の喜びでもあるからです。ただ、私たちがクリスマスを喜び祝うのは、それだけが理由ではないということです。クリスマスが私たち一人一人にとっての大きな喜びであるのは、イエス・キリスト、このお方を通し現された神様の出来事がまだ終わったわけではないからです。なぜなら、それは、復活の主イエス様が再びこの地上にやって来られるまで続くものだからです。そして、それを私たちに教えてくれているのがこの日の御言葉です。そこで、御言葉はこう語ります。「キリストは、神の身分でありながら、神に等しい者であることに固執しようとは思わず、返って自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じものとなりました」と。

このように、私たちがクリスマスをお祝いするのは、神の子であるキリストがイエスという私たちと同じ人間としてこの世を歩み、しかも、私たちと同じように人の子として生きた、この事実に基づくものでもあります。ところで、このイエスという名前がどういうものであったのかは皆さんご存知でしょうか。イエスという名前は当時非常にポピュラーな名前でありました。イエスという名前は町中至る所で見つけることができたのです。ですから、その名が示すことは、イエス様がありきたりの人間であったということです。従って、そういう意味で、イエス様は私たちと変わらない者であった、イエスという名が伝えてくれていることはこのことです。ただし、この同じということの意味は、神の子が人の子に変化した、人間に成り代わったということではありません。キリストが「イエス」になったということは、その生涯が神の子の仮の姿であったということではないからです。神の子のまま、私たちと同じ人とし

て歩まれた、それがイエス様でありました。ただ、この日の御言葉は、そのイエス様についてこうも語っているのです。

「人間の姿で現れ、謙って、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」と、そして、この、あらゆる名に優る名とは、イエス・キリスト、このお名前です。ありますが、ただ、「このため」と言われていることを私たちはどのように理解すればいいのでしょうか。イエス・キリストという名は、イエス、それが救い主、であるということです。ですから、私たちがイエス・キリストというその名を唱えるということは、「イエスは主なり」とそう自らの信仰を告白していることなのです。そして、これについて、先ほどの御言葉は、イエス様が謙遜なまま十字架につかれた、だから、そのためにあらゆる名に優るイエス・キリストというこの名が与えられたと言っているのですが、ですから、「このため」と言われていることはイエス様の十字架を指してのことです。つまり、ありふれた名を持つイエスが十字架ゆえにキリストと呼ばれるようになったと言っているのです。けれども、先ほど私が皆さんに申し上げたことは、「イエスがキリスト」と言われていることとは正反対のことでもありません。

イエス様の受肉、つまり、神の子であるイエス様が人の子としてお生まれになったということは、キリストがイエスになったということです。そして、それを記念するのがクリスマスです。ところが、御言葉がその次に語っていることは、十字架の功績によってあらゆる名に優る名が与えられた、それが今申し上げた「イエスがキリストになった」ということです。ですから、このことは私たちを深く悩ませることになります。ただ、イエス様が神の子であり、人の子とであるということを説明しようとするならば、そのように説明するしかありません。けれども、御言葉がイエス様についてはっきりしたことを語ろうとすればするほど、そこで語られている内容は、私たちの頭の中では、整理できない事態を招く

のです。けれども、6節から11節に記されている、いわゆる、「キリスト讃歌」と言われている、このパウロ以前に成立した信仰告白はその両方について語るのです。それは、イエス様について語る場合、神の子であり、人の子であるという、このことを語らないわけにはいかないからです。ですから、そこで言われていることを分かりやすくいうと次のように言い換えることができるように思います。それは、キリストはキリストだ、キリストだから、あらゆる名に優るその名が与えられたのだと。

ただ、そうであるなら、イエスというこの名前はどんな名前でもよかったです。しかし、イエスと名付けるよう命じたのは御遣いであり、神様でありました。それは、このありふれた名前の中にこそ、キリストのキリストたる所以が現されているからです。それゆえ、この名をおいて他にキリストにふさわしい名前はなかった、そして、そして、事実、ヘブライ語のヨシュアに対応するイエスというこの名が、「主は救い」という意味であるように、それが神様の御心でもあったということです。ですから、イエスというこの名前は、キリストはキリストだからということすべて物語っているものだとも言えるのでしょうか。それゆえ、キリストの受肉も、イエスの復活も、つまりは、このキリスト讃歌の中で語られている、私たちの整理つかない事態は、キリストはキリストだからというこの一言で説明尽くされているとも言えるのです。そして、それは、正しいことであり、間違っていない。けれども、このAはAとの説明は、いわゆる、トートロジー、同語反復と言われているものであり、作家の佐藤優氏によれば、欧米においては、議論の際などには避けるべきものなのだそうです。しかし、このキリスト讃歌では、あえてその禁じ手をもってイエス・キリストについて語っているのです。しかも、それが私たちの信仰告白となっている、そして、この告白は、藤沢教会員のすべてが受洗の際に告白したものでもありました。そして、そこで私たちが心に刻みつけたことは、キリストはイエスであり、イエスはキリストである、ということでした。

ところで、様々な議論の場において、トートロジー、同語反復を避けるよう戒められているのはどうしてなのでしょう。それは、一つには、A=Aでは、議論が成り立たないからです。つまり、説明になってい

ないということです。そして、説明になっていないと言うことはつまり、それについてはどうとでも解釈可能だということです。つまりは、それを聞いたその人のイメージ、理解の仕方ですべてが決まってしまうということです。ですから、キリストがキリストである、教会は教会である、イエス様と教会の世間でのイメージが良くも悪くもなるのはそのためです。家族は家族、夫は夫、妻は妻、関係性を現すこれらの言葉がいい意味で語られる場合もあれば、悪い意味で語られる場合もあるように、だからこそ、言葉は正しく用いられ、理解されなければならない、私たちはそう考えるのです。そして、それは確かにその通りです。特に、今の時代、私たちキリストの教会は、正しく聖書の教えを世に現していく責任がかつて以上に強くなってきたように思います。それは、今、間違った信仰が世間を騒がせているからです。

ただ、そこで正しいものは正しいと言ったところで、その正しさが伝わるものではありません。また、そこで私たちが自らの信仰告白を持ち出して、オウム返しのようにそれだけを語れば、それで私たちの信仰の正しさが伝わるわけでもありません。そもそものところで、私たちは信仰によって義とされたとしても、罪人である私たちは、その罪ゆえに神様の御前にあっては過ちを犯し続けるものであるからです。ですから、御言葉をもって正しさを主張されればされるほど、御言葉が私たちの頭の上を通り過ぎていくように思うのはそのためです。それゆえ、正しさを主張しないということは、そういう意味でたしなみ深い行為だとも言えるのでしょうか。けれども、私たちが自らの信仰を自らの言葉をもって告白するということは、そういうたしなみをもってのことなのでしょう。『キリスト讃歌』は最後にこう締めくくられているのです。

「こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの皆に跪き、すべての舌が『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです」と、そして、こう私たちが告白するのは、キリストの受肉の出来事と、イエスの十字架と復活の出来事が神様の御業であり、そこに神様の正しい御心が現されていると信じているからです。けれども、キリスト・イエスにおいて現された神様の御心は、我が子を貶めるものであり、卑しく

惨めな結末を迎えるものでもありました。つまり、私たちの感覚、常識からすれば、その地上での生涯だけを見るなら、到底受け入れることのできないものなのです。ですから、そこで私たちがイエス様の神の子としての姿だけを見出すことができるなら、そのような誤解は避けることができるのでしょ。けれども、このキリスト讃歌が明らかにする、私たちが見なければならぬイエス様の姿とは、イエス様が神の子であり、人の子であるその姿でもあるのです。それは、どちらか一方ではなく、その両方を見つめればこそ、私たちは「イエスは救い主、キリスト」との告白へと導かれることになるからです。そして、それは、私たちにとって矛盾するものではありません。真実であり、正しいことなのです。では、どうして私たちは、それを正しいと言えるのか、私たちに問われていることはこのことで、それは、難しいことではありません。

このキリスト讃歌に先立ち、パウロが繰り返し一致ということを語っているように、その初めから様々な問題を孕んでいたのが主の教会でありました。それはパウロの手紙を読めば明らかなことです。人の様々な思惑によって、いつ壊れてもおかしくはなく、事実、パウロ自身そのことを深く憂慮しておりました。ですから、受洗準備の際に私が必ずお伝えすることは、こんなはずじゃなかった、やめておけば良かった、そう思うことが必ずあるということです。それは私自身そう思ったことがあるからです。そして、私がそのようにお伝えしているのは、聖書の御言葉が私たちの抱く疑いを頭ごなしに否定するものではないからです。このアドヴェント期間、私たちが聞いたイザヤ書 55 章で語られていたことは、神様が「私の思いはあなたの思いとは異なり、私の道はあなたたちの道とは異なる」と仰っているということでしたが、それは、イエス様が神の子であり、人の子であるということが、私たちの頭でいくら考えても、私たちの内側からはその答えが出てくることがないからです。だから、迷い、疑うのです。けれども、その私たちがイエス様は救い主と告白するに至るのです。ただし、それは、犬が猫になるように、私たちが別の何かに変えられるからではありません。私たちが変えられたと思うのは、神様の深い、本当に深い愛を経験するからです。ですから、クリスチャンとは

何かと言えば、神様の深い愛を知っている者、そのように言うこともできるのでしょう。けれども、多くの場合、私がそうであったように、神様の愛の深さを本当に知らないまま洗礼へと導かれたとも言えるのでしょ。しかし、生まれるということは、命というものは、そういうものなのではないでしょか。

命とは生きてこそそのものであり、想像の世界のものではありません。ましてや、紙の上だけのものでもありません。イエス様がそうであるように、それがどんなに惨めなものであっても、祝福から遠いと人に感じさせるものであっても、そこには間違いなく神様の深い愛があるのです。それを我が身を持って経験したのがイエス・キリストというお方でありました。ですから、御子の受肉の出来事、クリスマスは、このように神様の御前に立つ私たちの上に、神様の深い愛が、その祝福が間違いなく置かれているということをは明らかにするものなのです。そして、この祝福に与るのは、限られた者だけではありません。祝福の扉はすべての人に開かれ、そして、その扉とは、私たち一人一人であるのです。それは、御子イエスが聖霊によって人の子とされたように、聖霊によって主のものとしてされ、神様の深い愛の下に生きているのが私たちであるからです。そして、このことは、人から人へと経験として伝えられるものであり、それが私たちにこうして与えられている神様の深い愛でもあるのです。だから、パウロは別の手紙でこう言っています。

「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によって私たちは『アッバ、父よ』と叫ぶのです」と。それは、イエス様も、そして、私たちも、神様が「子とする聖霊」を送ってくださればこそ、神様を「アッバ、父よ」と叫ぶことができるからです。ですから、「アッバ、父よ」と叫ぶことが大切なのです。叫べばこそ、そこで私たちは、イエス様がキリストだと、キリストがイエス様だと、つまりは、「キリストはキリストだ」と経験として深く知ることになるのです。それは、この神様の深い愛が私たちの上より取り除かれることはないからです。私たちにとって、生きるということはそういうものであり、生きているからこそ、神様が働いて、他の者の命をも生かすことになる、乙女マリアの「お言葉どおり、この身になります

ように」との告白がそのことを私たちに教えてくれているように思います。では、そのためには何が求められるのか、福音に自分自身のすべてを投げ入れ、そこで御霊の働きを受け、自らの中に神の子を宿す体験をすることです。そして、この経験を既に行っているのが私たちクリスチャンでもあるのです。なぜなら、それが洗礼という出来事でもあるからです。だから、罪人でしかない私たちが聖餐の恵みを通し、自らがイエス様の命に与る者であることを、神様の深い愛によって生かされていることを、深く深く知らされることになるのです。それは、神様から「子とする聖霊」を注がれ、まさにイエス・キリストと同じ命に生きているからです。だから、パウロは、この日の御言葉の少し後で「私は、キリストとその復活の力を知り、その苦しみに与って、その死の姿にあやかりながら、なんとかして死者の中からの復活に達したいのです」とこう語るのです。

そして、パウロがこう語るのには、自らの願望を伝えたいからではありません。そこにキリストはキリストであるとの経験、神様の深い愛を知る恵みが置かれています。なぜなら、復活に至ると言うことはつまり、その苦しみに与り、その死をも同じように経験するものでもあるからです。そのため、そこで私たちは苦しみを取り除かれることを願うわけですが、イエス様が十字架の上で「アッバ、父よ」と叫んだように、パウロもそう願う一人でした。人として生きるということは、まさにそういうものでもあるからです。ですから、人として生きる私たちも一人の例外もなく、そのような苦しみを経験することになります。「アッバ、父よ」と叫ぶしかないので。しかし、そこでそう叫ぶからこそ知るので。キリストが私たちと苦しみを共にしてくださっている、そのキリストを通して神様も苦しみを共にしてくださっている、イエス様と同じように「子とする霊」を受けた私たちは、こうして生きることの苦しみを通して、深く深く神様を知り、だから、死をもって終わらないその先に希望を見出すことができるのです。そして、そのことを明らかにするのが、キリストがイエスとなり、イエスがキリストとなるという、この不可能とも言える不可解なことでもあるのです。

ですから、私たちがキリストはキリストだとそう告白するのは、この不可能で不可

解な時間の中にキリスト共に生きているからです。それは、キリストを人の子として生み出す力のある方が、死の深みよりその命を引き上げてくださる方でもあるからです。神の子であるイエス様はお生まれになり、そういう命を生きているのであり、そして、私たちもまたイエス様と同じ命を生きているのです。クリスマスの喜びが一時の熱狂で終わらず、常に私たちを包んでくれるのは、神様がイエス様と同じ命に生きる私たちのことを常に支え導いてくださっているからです。ですから、クリスマスおめでとうというこの言葉は私たちにとっては、そのような自らの信仰を告白するものです。それは、この喜びを分かち合うすべての命を神様は祝福の中に終わりまでを導いてくださっているからです。祈りましょう。

愛する天の父なる神様

あなたはその愛する御子を私たちの許にお遣わしになり、そして、御子を私たちと同じ定め置き、罪なき御子の十字架の死をもって私たちの罪を贖い、死の淵より甦らせ、再びその御許へと引き上げ、私たちの命の道筋をお示しく下さいました。しかし、それにも関わらず私たちは生きることに苦しみ、迷い、あなたの御名を汚すばかりの日々を過ごしています。けれども、そうであるからこそ、あなたは、そのような日々の中で深い愛を現し、その地上での生涯をより豊かなものとし、そして、私たちを愛する人々の待つ御国へと導いてくださっています。天の神様、あなたは、この日、このクリスマスに、私たちに一人の姉妹の洗礼の出来事を通し、私たちのこの思いを新たにしてくださいました。ありがとうございます。どうか、私たちがあなたの御名を褒め称えるにふさわしく、日々過ごすことができますように、あなたの望みでもある愛をもって、互いにいたわり、支え合い、これからを歩んで行くことができますよう導いてください。そして、私たちの目にはそまみちとしか思えないこの道をその信仰ゆえに王道とし、あなたへの愛と隣人への愛を貫く者となさしめてください。このクリスマスの恵みに心より感謝します。この祈りを貴き主イエス・キリストの御名によって御前にお献げいたします。アーメン。